

## 男の育児休暇 育児は「育自」

回復期入院リハ課 課長 小森 恭平

みなさんこんにちは。上戸町病院の回復期入院リハビリテーション課の小森恭平です。

この度2020年7月～10月の4か月間、育児休暇をとりました。

小森家は4人の子供が居まして、元来家事はするほうだと自負しており、育児休暇への自信もありました。感想としては「専業主婦も仕事と変わらない程大変だな」ということです。子供はこちらの思うようにはなりませんので、子供の一日のパターンに合わせて家事内容をスケジュールし「今度寝たら、これをやろう！」など準備が大事です。

仕事も準備が大事だと常に思っています。先を読んで準備して実践していく。

家事も仕事もなんら変わらないと痛感しました。世の中には「イクメン」などと訳の分からない言葉



がありますが、男性であっても、育児・家事をするのは当たり前だと思っています。夫婦はお互い自立（自律）していることが大事です。

育児期間中に頂いた沢山の温かい言葉を胸に、これからも家事に育児に仕事に精進していきたいと思っています。育児休暇取ってみたいいな～と思っている男性！是非！

育児は「育自」らしいですよ！

## 編集後記

昨年末、上戸町病院でSVS学習会を開催しました。SVSはソーシャルバイタルサインと読み、体温・呼吸・脈拍・血圧などを指すバイタルサインに対し、生活背景、家族関係、緊急時の連絡先、地域とのつながりなど、患者をとりまく社会的な側面のことを意味します。

上戸町病院では、無料低額診療を実施していますが、社会的経済的に困っている患者さんにどう気づき、どう対応するかをテーマとしました。約50名が参加、真

っ直ぐに意見を出し合う医師、看護師の姿を眩しく頼もしく思いました。

たとえ無料低額診療に繋がったとしても、その方が人間らしく豊かに生活していくためには、次はどのような公的制度に繋げていくべきなのか等課題は山盛りです。しかし、まずやってみる、話しを聞いてみる、診てみる。私たちは困っている方に寄り添う姿勢を持ち続けたいと思います。そこに我々の存在意義があるのだという強い信念を持って。(事務長 新木士朗)



### 交通アクセス

長崎バス・二本松口経由ダイヤランド行き「上戸町」バス停下車すぐ

救急からリハビリ・在宅まで安心できる病院をめざして  
社会医療法人 健友会



## 上戸町病院

〒850-0953 長崎市上戸町4丁目2-20  
TEL 095-879-0705 FAX 095-879-3388  
地域連携室  
TEL 095-832-5615 FAX 095-832-5616

<http://www.kenyukai.or.jp>

上戸町病院のHPもご覧ください。

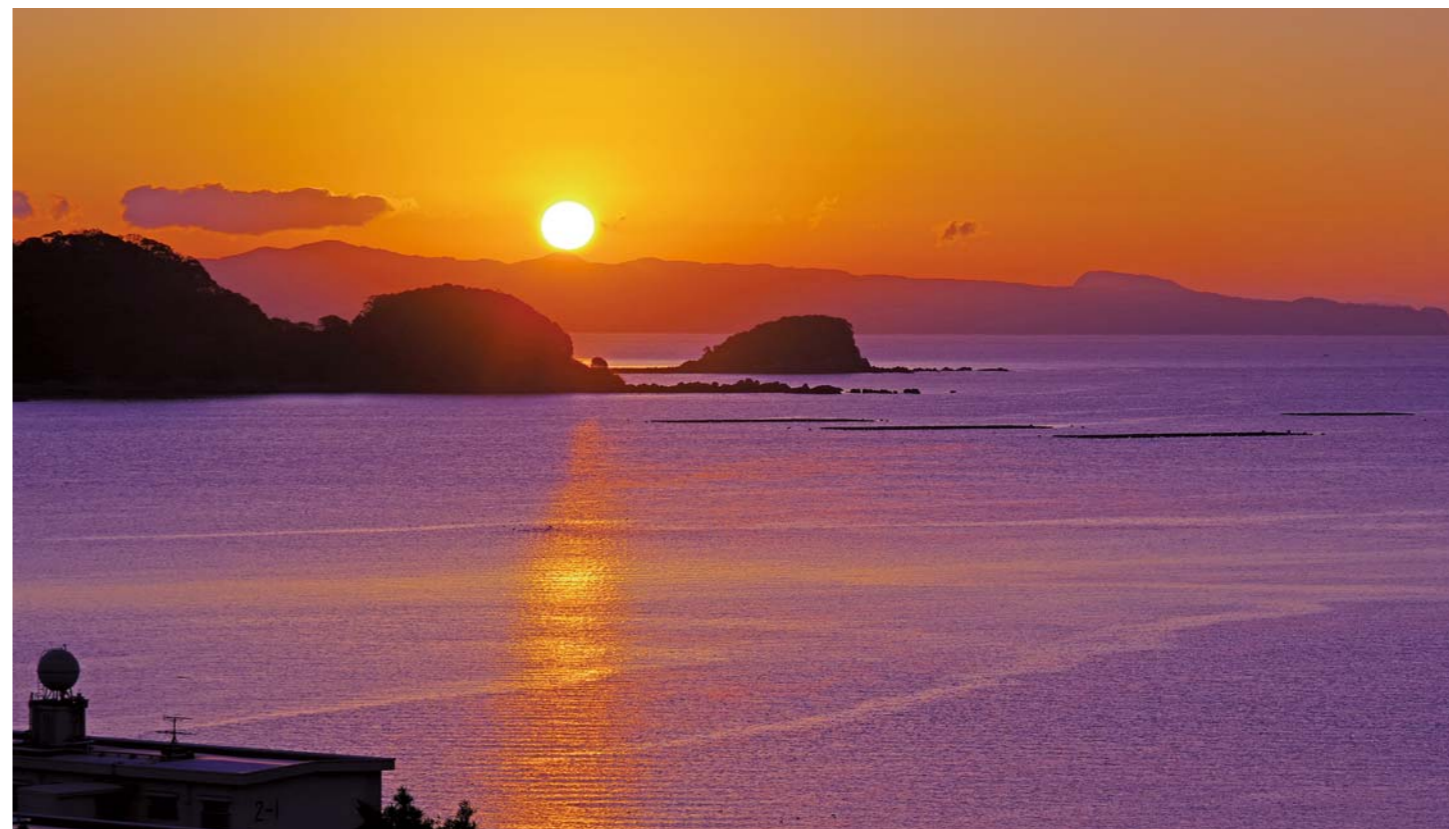
上戸町病院 検索



社会医療法人 健友会  
上戸町病院

# すこやか上戸町

2021.1月発行 第35号 発行元：上戸町病院地域連携室 発行責任者：三宅裕子



## 新年のごあいさつ

上戸町病院 院長 三宅 裕子

皆さま、平素より大変お世話になっております。  
新しい年を迎え、いかがお過ごしでしょうか。

ご迷惑をおかけし、まことに申し訳ありません。  
残念ながら、コロナ禍は長期化の様相を見せています。私たちには、感染拡大防止のためあらゆる必要な手立てを講じ診療を継続する責任があります。同時に、コロナ禍で深刻化する生活困難のため医療・介護を受けられない方々に、寄り添う活動も重要と考えています。経済的な補償、公的扶助を伴う感染対策を国に求めていくことも必要です。

昨年から今年にかけて、新型コロナウイルス感染症の影響を受け、私たちの日常生活が一変しました。「見えない敵」に向き合う、緊張の日々が続いています。これまで大切にしてきた行事や活動も制限を余儀なくされ、季節の変化を感じ取るいとまのないまま、新年を迎えました。

上戸町病院では、刻々と変化する状況の中、手指消毒・マスク着用の徹底、発熱外来のための駐車場へのコンテナの設置、診療内容の見直しや面会制限のお願い、職員の行動制限などの対策を講じてまいりました。これらは、地域医療を担う私たち上戸町病院の機能を維持するために必要な措置でしたが、地域の皆様には

「いのちの平等を尊重し、いつでも、だれもが安心してかかる病院をめざします」

上戸町病院の理念・基本方針は、この一行から始まります。

以前に比べ人と人がつながりにくい情勢のなか、病院の理念に立ち返って、地域を守る役割を果たしていく所存です。

今後とも、よろしくお願いたします。



シンボルマークの意味 桃色は、平和の象徴の鳩 緑色は、病院を囲む上戸町の自然 赤色は、病院で働く人達の情熱を表しています。  
2011.5月に病院内で募集し、投票の結果、当選したシンボルマークです。



## 終末期患者の思いに寄り添い、 願いを叶えるために

2階病棟 病棟師長 中ノ瀬志穂



私は、一般急性期と地域包括ケアの病床を有する2階病棟で看護師として勤務しています。当病棟では、内科・総合診療科・整形外科といった多様な疾患に対するケアや、急性期・慢性期・終末期といった様々な段階にある患者様の看護に携わっています。今回、終末期の患者様との関わりにおいて、その方の願いを叶えるために、スタッフと協働して取り組み、思いに寄り添うことの大切さを再認識できた1例について紹介します。

A氏(60代男性)は、脳腫瘍術後の後遺症で言語障害がありましたが脳腫瘍でA病院、泌尿器科でB病院、内科でC診療所に通院しながら独居で生活をされていました。食事が低下し、嘔吐を繰り返していたため、定期受診の際に体動困難となって倒れているところを発見され、当院へ救急搬送されました。精査の結果、BorrⅢの進行性胃癌と診断され、周囲への転移もあり手術の適応とはならず、予後は1ヶ月程度という結果でした。ホスピスへの転院も検討されましたが、コロナ禍の影響もあり、福岡に在住の弟と一切面会ができなくなるということで断念されました。また、弟が在住の福岡へ転院することも検討しましたが、知らない土地へ行くことを本人は望まなかったため、当院で看取る方針となりました。病状説明と予後告知を受けた後のA氏は、「なぜ、もっと早く癌を見つけることが出来なかったのか?」「もう本当に手術はできないのか?」と病気に対する否認や医療機関に対

する不信感もみられ、スタッフに対しても介入を拒否したり、声を荒げて怒りをぶつける場面もみられました。A氏の葛藤する気持ちを受け止めながら関わり続け、時には時間をかけて話を傾聴していくことで、少しずつ自分の思いを話してくれるようになっていきました。その中で、最も心に残っていることは、「いつもありがとう。みんなにも今までごめんなさいと伝えてくれないかな。僕も心を開いて話したいと思えるようになったよ。これから宜しくお願いします。」と涙を流しながら言ってくれた言葉です。

残された時間で何かやりたいことはないかという、こちらからの問いかけをきっかけに、A氏は人生を振り返り始め、1つの願いを話して下さいました。それは、後輩にラグビーボールを送りたいという願いでした。A氏は高校時代にラグビー部で県内2位になったことが一番の思い出であり、自分の誇りであると語っていました。ラグビーの話をする時は、いつも笑顔で嬉しそうな表情を見せてくれました。そこで、主治医と相談し、A氏の母校へラグビーボールの贈呈と試合見学の計画を立てました。実行当日、A氏はリクライニング式の車椅子に座り、酸素ボンベを持って、主治医・看護師・理学療法士・医学生・学生担当事務が同行して会場へ向かいました(写真)。会場では、監督や選手の協力のもと、試合見学と贈呈式を行うことが出来ました。後輩選手に対して「今年の実績はどうですか。」「がんばって

ださいね。」など声をかけてエールを送り、選手と握手をしているA氏は、少し照れながらも、とても嬉しそうな表情をされていました。帰りの道中では、穏やかな様子で「感動した。」と話されていました。それから2週間後、A氏は弟に付き添われながら安らかに永眠されました。

後日、弟より「兄の意思で、託されていたものを送ります」と連絡があり、当院へ車椅子の寄贈がありました。こちら側のことまで気遣ってくれていたA氏の気持ちに触れ、感動すると同時に、少しでも思いに寄り添うことが出来たのではないかと感じる事ができました。A氏との関わりを通して、患者様の残された時間にどう向き合うべきか、看取りをする上で看護師として何ができるのかを深く考え、信頼関係を築くことや思いに寄り添うことの大切さを再認識することができました。なによりも、貴重な時間を共に過ごすことができ、A氏の暖かい気持ちに触れることができ、本当に良かったと感じています。

病棟に入院されている患者様の疾患や状況は多様であり、それに伴ってニーズも多様化しているため、総合的な看護ケアの提供が求められているように思います。しかし、どのような状況であってもA氏を通して再認識できた「思いに寄り添う」ことをこれからも忘れず、一人一人の患者様との関わりを大切にできる看護師でありたいと思います。

## コロナ禍の学生支援

医系学生支援課 課長 國貞 貴大

今もなお、世界各地で新型コロナウイルスの猛威が続いています。感染への恐怖と同時に私たちの日常は、コロナの発生により大きく変化しました。

長崎民医連も奨学生活動ができない時期もありましたが、学生からの要望もあり、週1回の昼食会は手作りのお弁当配布へ、学生企画はオンラインを活用するなど工夫して開催しています。そんな中、経済的に困窮している学生がいるとの情報が寄せられ、直ぐに会いに行きました。元々、学費と生活費を自身で工面していたという学生。貯金もなくコロナ禍でアルバイトの収入が減り、学費の滞納と併せて必要な教材すら購入できず、「この状態が続けば退学も考えな

ければならない」と話していました。私たちは、他にも困っている学生がいるのではないかと全国各地の経験を参考に「食材支援活動」の開催を決めました。職員や地域の方へカンパを呼び掛けたところ、多くの食料品や日用品が届き、9月28日と10月3日の2日間平和町のサポートセンターを会場に食材支援活動を開催することができました。食材を受け取りに来た学生は述べ25人。その際、実施したアンケートには「生活費に困っている」、「友達ができるか不安」、「オンライン授業の環境が不十分」、「今後の就職活動

が心配」など、学生たちの不安と焦りの声が寄せられました。

コロナ禍での社会的混乱は今後も予想されますが、どんな時でも私たち学生担当者は学生の思いに寄り添い、サポートセンターが学生にとって「仲間をつくり共に学び成長できる場所」となるよう、今後も活動内容を模索しながら続けていけたらと思います。



## 『キッズ(こども)食堂』の取り組み

栄養課 課長 揚野 歩

『こども食堂』をご存じですか?『こども食堂』とは、食事を提供するだけでなく、子供が子供達同士であるいは、子供が地域の様々な大人達と触れ合うことができる交流の場として機能し、まちづくりの拠点となる食堂のことです。上戸町病院HPH(※)委員会でもこども食堂を開催することとなり、コロナ禍でなければ、子供達と一緒に食事を作り、一緒に食事をし、いろんな話をしたいと考えていました。しかし、コロナ感染拡

大に伴い今回は、30食のお弁当を子どもたちに配布しました。今後、これを契機に食を通じて異世代の交流、孤食を防いで笑顔で食卓を囲めるような場所の提供、そして地域と繋がる取り組みができたらと考えています。

(※)HPH(Health Promoting Hospitals and Health Services)  
…患者の健康だけでなく、医療スタッフや地域住民に対しても保健衛生活動を行うこと

